

2011.09.16

於 日本大学

日本心理学会第75回大会 ワークショップ（宗教心理学研究会第九回研究発表会）

「宗教心理学的研究の展開（9）—仏教（仏教徒と宗教心理学）—」

「教団に対する宗教心理学からの繋がりづくり」

太田俊明 Oota Yunmyou (西山淨土宗教学研究所)

【仏教徒にとっての宗教心理学】

太田からは宗教心理学と教団・教学（宗派学）との繋がりづくりを提案する。東日本大震災では、多くの仏教者はじめとした宗教者が現地へ行き、宗教活動及び対人援助活動に参画している。このことはメディア等でも数多く取り上げられており、多くの人の心中に残ると考えられる。しかし、それらの活動が宗教心理学の立場から検討された場合、教団・教学（宗派学）と関係が構築できるであろうか。

教団は信仰者の共同体であるばかりでなく、教学（宗派学）・布教（教化）・儀軌・社会貢献・実務が5つの柱として成り立つと考えられ、特に教学（宗派学）は教団立脚の基礎としての位置づけがある。また教団は信仰者に対する宗教的・教学的・心理的なサポートの面も挙げられる。

一方、宗教心理学は近年勃興しているものの、一部の「先駆的もしくは大規模な」教団を除き、どのように対応すればいいか理解困難な面があるのではないか。その背景として教学（宗派学）の重視とは訓詁学的見解の発展と言う風潮があり、教学（宗派学）が本来持つ宗教的な体験・経験を見忘れがちであること。更に教団内部には以下の3点の不安があるのではないかだろうか。

1) 教団として宗教心理学という学問自体どのように捉えていいのか理解困難であること。仏教自体心理学的側面を強調するため、かえって宗教心理学探求の意味を理解しづらくなること。

2) 教義・教学（宗派学）を心理学の範疇に取り込むことに対する恐れがあること。この背景として心理学が主となり、教義・教学が脇に置かれることに対する「教団的危機意識」が働くこと。また教学（宗派学）が本来祖師の教えを中心にして文献学的な展開を行う一面がある一方、信仰者が主体的かつ実践的に「観ずる」一面があった。しかし仏教学の影響からか文献学的展開のみに視座が陥っているのではないか。一部の教団ではこのことに気づき、実践面の強化を図りつつあるが、多くの教団では取り組みが遅れていることが挙げられる。

3) 2) に関連することであるが教団内の僧侶養成プロセスが心理学的に解明されることで、宗教者としての特別な行動の背景の喪失が生ずると言う不安があること。

そこで、私自身（他教団系の団体にかかわっていた経緯と）教団での経験を踏まえ、宗教心理学と教団・教学の関係性のきっかけを提供したく思う。

《かぎことば》

布教（教化） 教団 宗教的な廻心 仏教カウンセリング インテグ럴・サイコロジー 加行

1. 発表者はライフコースと研究上の関心が極めて近く、それは以下のように変化している。

（得度→加行→）

カウンセリング現場における面談漏洩→自死問題等に関心を持つ

→大いなる存在との出遭い→仏教（真宗）カウンセリング

→トランスペーソナル（インテグラー・サイコロジー）

→現代社会における宗教の社会貢献

2. 発表者の立場は教団の研究所に属する研究員であり、教団及び教団の教学（すなわち宗派学）を護持する立場にある。仏教学には仏教学と宗派学があり、前者は文献学を中心として理論を構築するのに対し、後者は宗祖の仏教理解を通じた宗派の護持の立場に立つことを目的とする。それは文献的な立場を踏まえるものの、同時に主体的・体験的な理解も必要とする。また、後者を学び・研鑽するものは「単に所属する宗派さえよ

ければいい」ということでは意味が無く、「同入和合海」の如く他の宗派学の人に対しても協力し合う必要もあるのではないか。この立場を鮮明にする理由として、従来の宗教心理学の立場は心理学的な立場か宗教学（仏教学）的立場であり、ストリートレベルの仏教者としての視点がやや欠け気味ではないかという雰囲気を先日までの学会発表を通じて感じ取ったことが挙げられる。

「また浄土宗には鎮西派（浄土宗）と西山派（西山浄土宗および浄土宗西山各派）があり、前者の関係者からの宗教心理学への論考は数多く存在するが、私は後者の所属である。西山派に所属している関係者からの宗教心理学へのアプローチはあまり多くない。その点では宗教心理学の概念等が掴みにくい教団にとって一つのきっかけが提供できるのではないだろうか。」

3. しかし、後者の宗派学曳いては教団の現状は…。本来、教団は教学・布教（教化）・儀軌・社会貢献・実務が5つの柱と考えられる。仏教と心理学との関係についての認識についてはどのように思っているのだろうか…？
4. また、教団・教学の枠を超えた宗教（の本質）と科学、特に臨床心理学・インデグラルサイコロジー・カウンセリング等との対話から仏教者は「対機説法」の在り方。曳いては我々の在り方を見直す必要もある。教団に属する僧侶は日常法務と（多くの場合）兼業で忙殺されており、本来の役割を見直す時間と余裕がないのが現状である。また宗務所勤務者も宗教心理学に興味関心を持っていたとしても、受け入れられるだけの雰囲気とツールが存在しないケースも考えられる。これらを変えていくにはどうすればいいのだろうか。
5. その一つとして「仏教カウンセリング」からの宗教心理学へのアプローチ挙げられる。「仏教カウンセリング」の根本構造は円環的かつ開会思想<sup>1</sup>を基盤としたものであり、宗派を超えて宗教観・曳いては人間観を語り合うことを通じて宗教の在り方・教団の在り方・宗教間（観）対話について深めていくことが出来るのではないか。
6. つまり「仏教カウンセリング」をきっかけに宗教心理学と宗教教団との関係を近づけていくことが必要である。宗教心理学と教団との距離が近くなることにより、信仰者と教団の関係が現状の閉塞的な雰囲気の打破と新しい価値観の創造につながるものと考えられる。教団の役割はこの新しい価値観をいかにして作っていくのか。そのきっかけづくりを提供するところにあるのではないだろうか。
7. 確かに教団は長い伝統をもち、一定の社会評価を得ている。それゆえに一朝一夕に急激な変化を期待することは極めて困難と言わざるを得ない。また、所属者の意識変革は尚更である。
8. それでも教団を、教学を尊重する立場ゆえ現状変革へのヒントを提供する必要がある。そのツールとして（粗雑ではあるが）5点提示する。
  - (1) 文献を現代語訳し、その上で信仰者の体験と照合し集積する方法。
  - (2) 儀軌を中心に宗教意識が変化したか否かアンケート形式で調査する方法。
  - (3) 信者のやりとり。及び信者間の交流によって意識が涵養されるかどうか見ること。
  - (4) 伝法・伝戒での体験を体系化する方法。
  - (5) 信仰者のライフコースから体系化する方法。
9. 発表者は上記の（4）と（5）を中心に話を展開する。
10. 加行の目的は宗教的な廻心を再確認もしくは疑似体験させることによる僧侶としての意識促進と自己を超えた存在があることへの気づきに主眼が置かれる。偶然、発表者は加行を受け、満行した際に授与される伝法の巻物に惹かれる。（図2）また加行満行の際「加行が終わってからが本当の行である」と言う監督

<sup>1</sup> 本来は天台思想であり、『法華経』を通じて一切は大乗である仏に止揚されることを指す。西山派ではこの開会思想の影響があり、一切の行は『觀無量寿経』において阿弥陀仏に止揚され、自力諸宗の法門すらも『觀無量寿経』の法門（觀門）を通じて本願（弘願）に出会った後は調機誘引される法門（行門）として位置付けられる。

のひとことが印象に残った。

- 1 1. その後仏教カウンセリングとの出会いによって仏教カウンセリング構造からインテグラル・サイコロジーの構造に興味関心を示すようになる。(図1)
- 1 2. 構造図を元に伝法・伝戒の再検証を行うと…。(図3) のようになる。この図を通じて仏教は心理学的(インテグラル・サイコロジー的)構造であり、宗派学はこの構造を教団の立場から堅持するための主体的かつ文献的な学問であることに気がつかされた。また教団は(宗教者である)僧侶や(一般の)檀信徒にとって精神的・信仰心的側面の安定と独善性の防止を提供することにあると考えられる。
- 1 3. 以上より、私が言いたいことは…教団とは(神仏と言った)宗教性の本質を教学・儀軌・布教・教化等を通じて信仰者の信仰心涵養をはかる場である。したがって各々の心身の安定と精神性の発展深化を図る組織であり、その組織は臨床的であり生かされものである。
- 1 4. また、宗教心理学は宗教学的立場と心理学的立場、更には全人的立場の3つの展開からされている。これらは単に客観性を問うものではなく、信仰者の視点を入れることでより教団と心理学との関係的な側面を増進できると考えられる。
- 1 5. 宗教教団と宗教心理学との対話に関して…教団側の目的としては理論的な面と実践的な面との間が会通するために宗教心理学の知見を活用すること。両者の会通により信仰の意義の再確認と信仰促進が可能であるのではないかと考えられる。その為には、日々の活動を通じて統合・焦点化・接点を探求する必要がある。また、教学は行法や祖師のライフコースに基づいた言語表現かつ行動理論であり、内容的に鑑みると言説や行法の解釈の異なりに過ぎないこと。おそらく円環的思考と開会思想を基礎にした展開によって両者の促進が進むと考えられる。
- 1 6. 東日本大震災<sup>2</sup>をきっかけに、宗教者の役割。とりわけ仏教者の役割が大きく問われている。また同時に、人智の限界曳いては大自然と大いなる存在を重ね合わせる風潮を通じて宗教的な存在に対する関心は高まりつつある。しかしそれは従来の月参りや法式と言った日常行事と言った面ではなく、ビハーラ・仏教カウンセリングはじめ現場での心理的援助の面が増進すると考えられる。しかし、これらを行じ、かつ研究を発展させるには単に宗教と心理学の問題を見ていくだけでなく、憲法や教育基本法との問題。さらには以下の科学技術基本法の条文<sup>3</sup>を踏まえて深く考えていく必要があるのではないだろうか。

#### 科学技術基本法第一条

この法律は、科学技術(人文科学のみに係るものを除く。以下同じ)の振興に関する施策の基本となる事項を定め、科学技術の振興に関する施策を総合的かつ計画的に推進することにより、我が国における科学技術の水準の向上を図り、もって我が国の経済社会の発展と国民の福祉の向上に寄与するとともに世界の科学技術の進歩と人類社会の持続的な発展に貢献することを目的とする。

最後に、宗教心理学と宗教教団両者の繋がりについて、これから「教団として」始めようとする場合、「宗教的な目覚め」と言う面だけでなく「科学技術基本計画」における「ライフサイエンス分野」の範疇からの研究。もしくは「仏教カウンセリング」の範疇からの研究から入っていくと良いのではないだろうか。

<sup>2</sup> 大震災は地震と津波による被害、原子力発電所の破損による放射能汚染が注目されがちであるが、ダムの決壊についての視点が欠けているように見受けられる。この震災とはまた別に発表者は宗教者とダムの関係に関心を持っているが、いずれ別の場で発表したい。

<sup>3</sup> 前田惠學氏は科学技術基本法第一条「人文科学のみに係るものを除く」の文言に対し問題定義をされた。それを受け、発表者(太田)は翌年の同学会で文言解釈に関する発表を行った。

前田惠學「仏教教育の諸問題」『日本佛教教育学研究』13号 12頁 2005年4月

太田俊明「科学技術基本法に関する一考察」『日本佛教教育学研究』14号 2006年4月

## 【引用・参考文献】

- 太田俊明「五重相伝に関する一試論」『印仏』52-2 2004年  
太田俊明「仏教カウンセリング構造に関する一試論」『日本佛教教育学研究』19号 2011年4月  
西光義敵「「真宗カウンセリング」の成立」(『援助的人間関係』1988年6月)  
西光義敵著『入門 真宗カウンセリング2 仏教とカウンセリング』(札幌カウンセリング研究会編 2005年)  
大塚盡雲「西山流「五重相伝」の教義的特色」『日本佛教学会年報』(『佛教信仰の種々相』) 平楽寺書店 2002年  
桜井達定「西山流五重の沿革」『西山学報』13号 1960年  
桜井達定『浄土宗西山流五重相伝考』西方寺 1961年  
桜井達定『増補改訂版 浄土宗西山流五重相伝考』西方寺 1979年  
上田義文『現代に生きる仏教的人間』本願寺出版社 1993年  
信楽峻磨『真宗学概論』(真宗学シリーズ2) 法藏館 2010年  
KEN WILLBER "THE SPECTRUM OF CONSCIOUSNESS"  
QUEST 1976  
(邦題 K. ウィルバー著 吉福伸逸+菅 靖彦訳  
『意識のスペクトル』 春秋社 上下2巻 1985年)  
西平 直『魂のライフサイクル—エンゲル・ウィルバー・シュタイナ—』  
東京大学出版会 1997年  
岡野守也『トランスパーソナル心理学』青土社 2000年  
岡野守也「東洋宗教とトランスパーソナル心理学」  
『シリーズ人間性の心理学 東洋の知恵と心理学』 大日本図書 1995年  
前田惠學「佛教教育の諸問題」『日本佛教教育学研究』13号 12頁 2005年4月

(追記)

本発表レジュメを纏めて以降  
葛西賢太「運動としての『佛教心理学』」『日本佛教心理学会誌』2号 2011年  
があることに気づき読したもの、時間的関係上葛西氏の論点との間を和することが出来難かったことを付加します。

図1は

西光義敵「「真宗カウンセリング」の成立」(『援助的人間関係』) で示された佛教(真宗)カウンセリングの構造を太田が一部修正したものである。  
太田俊明「仏教カウンセリングに関する一考察」『西山学会年報』10号 2000年

図2は

現在西山派の五重相伝で採用されているものである。  
(桜井達定『増補改訂版 浄土宗西山流五重相伝考』西方寺 1979年)

図3は

K. ウィルバー『意識のスペクトル』(吉福伸一・菅靖彦訳) 日本語版1巻261頁  
を依用した上で図1及び図2を加えたものである。

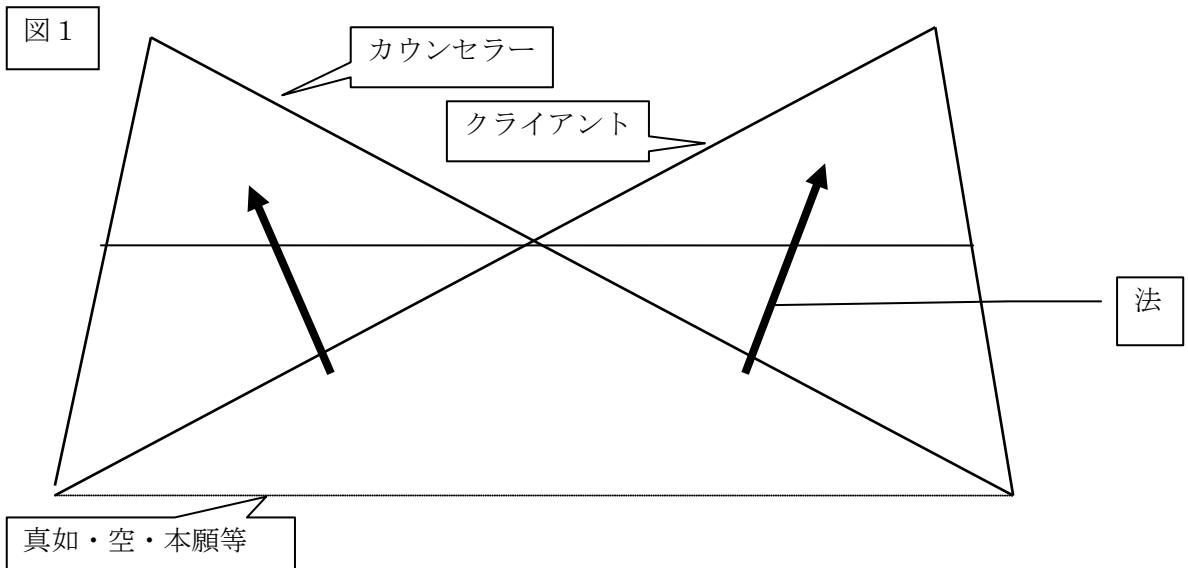
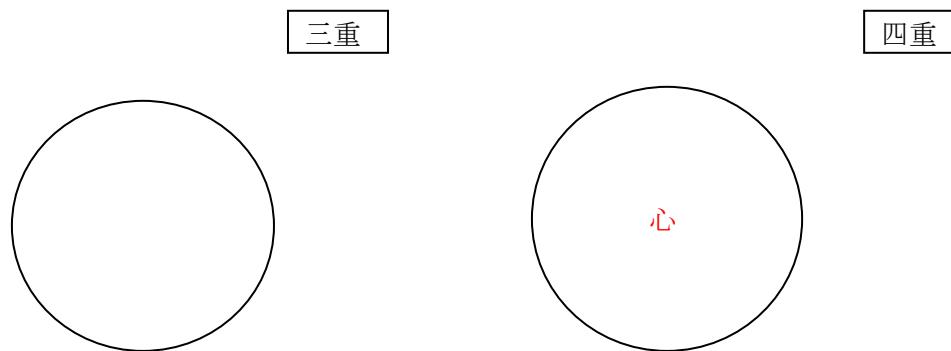


図 2 西山派五重相伝における図



西山派で行われる五重相伝の四重には 言南無者即是帰命 亦是発願廻向之義 言阿弥陀仏者即是其行 以斯義故必得往生 (『観経疏玄義分』和会門 別時意会通) とある。

